
君のそばで

ヤンヤン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のそばで

【Nコード】

N3296E

【作者名】

ヤンヤン

【あらすじ】

言葉が届かなくて苦しむ彼と、彼を見つけた彼女の話。あなたの大切な場所は、どこですか。

こんにちは。

そいつは、いきなり現れた。

そしてさようなら。

部活帰りの薄暗い道。人気のない路地裏で、全身が漆黒に包まれ、フードを目深に被ったそいつは、僕に別れを告げた。

……えっ。

お腹に衝撃。何が起きたかわからなかった。触って確かめたら、手が血だらけになった。

刺された。

理解したとたん、全身から冷や汗が噴き出した。

遠ざかる足音。僕を刺したそいつは、何事もなかったように去っていく。

意識を無くす直前に僕が見たのは、見えなくなる直前に振り返ったそいつの、いびつに笑った口元だった。

僕の名前は山下明。^{やましたあきら}僕はここで、殺された。

この世に未練たらたらだった僕は、見事に自縛霊になった。

毎日自分が殺された場所で立ってる。どうやらここから離れられないようだった。

足元には、沢山の花束やメッセージが置かれている。

今だに血の跡が残るそこに置かれたそれらは、僕の両親、友達、それに近所の人達が置いてったものだ。

両手を合わせて、号泣する父さんと母さん。まだ小学生の弟は、実感がわいてないようだった。帰り際の、父さんが母さんの肩を抱く後ろ姿が、妙に小さく見えて、悲しかった。

クラスの代表で来たのだろう、おさげに眼鏡と、典型的な真面目っ子な山口さん。クラスの人気者でムードメーカーの樋口。^{ひぐち}クラスの委員の二人は、花束と、びっしりとメッセージの書かれた色紙を持ってきた。

声を押し殺して泣く山口さんと、下を向いて下唇を噛んでる樋口。色紙を置く前に、樋口は大声でメッセージを読んできた。震えるその声は、僕の胸奥深くまで響いた。

一番の大人数で来たのは、サッカー部の奴らだった。背番号七番。僕のユニフォームにも、メッセージが書かれていた。スパイクも一緒に置かれたけど、僕はもう皆とサッカーが出来ないことを思い、寂しくなった。

沢山の人が来た。先生、近所のおばさんや、たまに遊んでやった子供たち、知らない人だって来た。

『ここにいますよ。目の前にいますよ』

僕の声は、誰にも届かなかった。

僕が死んで一週間がたった。

色んな人が来たけれど、一番気になる人物が来てないのが、僕は気になっていた。

藤堂桜^{フジドウ　サクラ}。僕の幼なじみであり、僕の好きな人。幼稚園の時からずっと同じクラスで、彼女を見るだけで僕は元気になれた。

来てはくれないのだろうか。

もう話すことは出来ないだろうけど、僕は彼女に会いたかった。

次の日、彼女が来た。両親に連れられて。
そしてこの日、僕は死んだことを一番後悔した。

いつも笑っていた彼女。僕と付き合ってるんじゃないかと冷やかされて、真っ赤になって怒っていた彼女。サッカーの試合で、いつも応援に来てくれた彼女。一緒に帰ろう、と恥ずかしそうに僕に言った彼女。

そして、僕の殺された場所で、泣き崩れる彼女。

その初めて見る姿に、僕の胸はたまらなく締め付けられた。

僕はここにいる。ここにいるのに！

こんなに近くに居るのに、泣いて肩を震わす彼女に、寄り添うことも出来ない。

せめて、君が気付いてくれなくても。

僕は彼女が帰るまで、震える小さな肩をずっと抱きしめていた。

誰だ、僕たちの幸せを奪ったのは。

彼女の笑顔を奪ったのは誰だ。

僕の胸に、憎しみの炎が点^{とも}るのを感じた。

その日から、僕の心は、僕を殺した犯人への憎悪で満たされていた。

そして、彼女がその日の出来事を報告しに来てくれる、その時だけが、僕の心が休まる時間だった。

そして、その日はやってきた。

いつものように、僕の前で報告をする彼女。僕もいつものように、彼女の前に座って話を聞いていた。

気づくと、いつのまにか彼女の後ろに一人の男が立っていた。男は彼女に聞いた。ここで誰か死んだのですか、と。

はい、と彼女は答えた。好きだった人が死んだのだと。

僕は照れ臭くつてにやけてしまった。

その男も笑っていた。

それを見た瞬間、背筋に電撃が流れたかと思った。

そのいびつな笑い、忘れるはずがない。

生前に見た最後の光景が蘇る。

さくらがその男に背中を向けた。

そして・・・。

僕は彼女の隣で泣き崩れていた。

血が止まらない。横たわった彼女の下に、血で出来た水溜まりが広がっていく。

彼女の顔から、血の気が引いていくのがわかった。

なぜ、なぜ、なぜ。

何故彼女がこんな目に合わなくちゃいけないのか。

僕は彼女に必死に話し掛けた。

さくら！ 死なないでくれ！

彼女の瞳が少しだけ開いた。明らかに目が合う。

あきら君、やっぱりそこに居たんだね。

弱々しく喋る彼女。震える唇は紫になっていた。
最後の力を振り絞るように微笑むと、彼女は言った。

私も、そっちに行つて、いいかな。

そんなこと言うな！ さくらは生きてほしい。生きてるさくらが見たいんだ！

僕は願った。彼女が助かるようにと。幸せに笑う彼女をまた見たいと。

ふと、身体が吸い込まれるような感覚がした。見れば、彼女の中に僕が入っていくではないか。

僕は夢中で念じた。

死ぬな、と。

必死で彼女の名前を呼び続けた。

そして、僕の意識は光に包まれた。

一人の女性が、夕焼けが照らす川沿いの堤防に立っていた。

彼女は、昔好きだった彼のことを思い出していた。

ここは、思い出の場所。彼はよく、トレーニングだと言ってここを走っていた。

同じような夕焼け空の下、よく二人並んで下校した。

この堤防に一本だけ生えている、大きな桜の木。二人が小さい時は、よくこの木の下で遊んだ。

彼はこの木の下で、桜の花が好きだと言った。元気をわけてくれるらしい。私も、あなたが好きだよ。この一言は言えなかった。

彼はよく笑う人だった。

まるで向日葵ひまわりが咲いたような、そんな笑顔。

彼と居ると、自然と元気になれる、そんな人。

彼のおかげで、私は今生きている。

そう彼女は思っている。

彼女の背中には、古傷がある。
昔、通り魔に刺された跡だ。

この傷が作られた時、彼女は死ぬと思った。そうすれば、彼と同じ世界に行ける、そう思ったのだ。

でも、彼はそれを拒んだ。

朦朧とした意識の中、彼女は確かに彼の声を聞いたのだ。

凍えるように寒かった体が、温かくて優しいぬくもりに包まれたのを感じたのだ。

生きる、と彼が必死に励ましてくれたから、彼女は生きることが諦めなかった。

そして今、彼女はここに居る。

大好きだったんだよ。

その言葉を残して、彼女はこの場を後にした。

風が吹いた。

堤防の上、彼女がさっきまで居た場所。そこに、一人の少年がいた。

彼は空を見上げる。日は沈み、満点の星空が広がっている。

突然、彼の体が宙に浮かんだ。

しだいに高度を上げ、彼は町を見下ろした。

さようなら。

彼はそうつぶやくと、更なる高みへと上っていく。

どんどん加速して、彼は光の速さを超えた。

広大な宇宙の果てに、小さな光が見える。

あそこに向かおう。そして、もう一度生まれよう。

僕の大好きな、彼女の笑顔が咲く場所で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296e/>

君のそばで

2010年10月10日03時59分発行